■論　文■

フォーマルケアとインフォーマルケアの関連の研究とケア選好研究の接点

山　口　麻　衣*

抄　録

本研究の目的は，先行研究レビューと筆者が関わった実証研究結果を踏まえ，フォーマルケア(FC)とインフォーマルケア(IC)の関連の研究とケア選好研究の接点を探り，FCとICの関連の研究における高齢者のケア選好アプローチの課題と可能性を検討することである。FCとICの関連の研究では，国際比較研究や両者の正の関係の研究が近年多くみられる。ケア選好に関する研究は萌芽的段階にあり，FCとICに関する選好研究は多くはないが，両研究領域の接点といえる。地方と大都市での実証研究では，FCとICの組み合わせ選好が多いことやケア選好の関連要因としてはケア規範や地域特性などがあることがわかった。FCとICの関連の研究における高齢者のケア選好アプローチには，ケア選好概念の操作化の工夫などの方法論上や，ライフコースにおける時間的変化への検討などの理論上の課題があるが，ケア選好からのFCとICの関連の研究により，高齢者自身の意向を尊重したFCとICの議論の発展に寄与できる可能性がある。

Keywords：フォーマルケアとインフォーマルケア，ケア選好，高齢者ケア，ライフコース，ケア資源

Ⅰ．研究背景と目的

高齢化の進む我が国においては，高齢者に対する地域ケアの推進が課題とされている。地域における新たな支えあい（これからの地域福祉のあり方に関する研究会 2008）や地域における包括的なケア（地域包括ケア研究会 2010）への期待の高まりと同時に，家族介護の困難，地域格差，高齢期の孤立など包括的ケアが困難な状況への懸念も大きい。「2015年の高齢者介護」に関する報告書（高齢者介護研究会 2003）において高齢者の自立と尊厳の重要性が示されたが，介護保険制度施行10年を経て，当初掲げられた「介護の社会化」や「利用者主体のケア」の推進がどのようになされてきたのか問い直しながら包括的なケアを議論すべきであろう。その際，介護保険を中核とするフォーマルなケア（以下，FC）と家族を主としたインフォーマルなケア（以下，IC）の相互的な関連性を理解し，単に財政面やサービスの供給体制面からだけではなく，生活者である高齢

＊Yamaguchi, Mai
ルーテル学院大学　専任講師（社会福祉学科）

者自身の視点から分析することが求められる。高齢者自身のケア選好（preferences）とその関連要因に着目することにより，ミクロな生活者の視点からFCがICとどのように関連しているのかを理解することができるのではないか。筆者の属する研究グループでは，これらの問題関心から地方小都市と都市部の二地域でFCとICの関連に関する実証研究を実施した。本研究の目的は，先行研究レビューと筆者が関わった実証研究結果を踏まえ，FCとICの関連の研究とケア選好研究の接点を探り，FCとICの関連の研究における高齢者のケア選好アプローチの課題と可能性を検討することである。

Ⅱ．先行研究レビュー

1. FCとICの関連：古くて新しい，ローカルでグローバルなテーマ

ケアは多義的な概念であるが，国家，市場，家族，およびボランタリーセクターの相互関係に伴う活動と一連の関係（Daly & Lewis 2000）と定義づけられるように，関係性を包含する概念である。FCとICの二分法で研究領域をとらえるとケアの多様な関係性の把握が難しい面も否めないが，ここではFCと家族ケアを中心としたICが相互にどう関連しているのかを明らかにするために，この分類で議論する。

高齢者ケア研究の動向を概観すると，当初はFC研究とIC研究が個別に発展してきたといえる。たとえば，FC研究において，マクロなアプローチでは，高齢者ケアに関する制度・政策論を中心に，社会全体における費用，資源，負担といった側面から多く論じられてきた。メゾのアプローチでは，ケアやソーシャルサービスの提供主体である地域・自治体レベルの公的サービスの提供のあり方が中心テーマであった。

IC研究では，よりミクロな家族を中心としたインフォーマルなサポートの研究が積み重ねられてきた。サポート源としての子供は中心的なテーマであり，親子ジェンダー構成がケア内容に影響すること（Matthes 1995; Rossi 1999; Campbell & Martin-Marthews 2003; Lang 2004）や，親の配偶者の有無，親との距離，同別居などが親のサポートに関連すること（白波瀬2000；小林・杉原・深谷他2005; 林・岡田・白澤2007）などが論じられている。これらの多様なサポート研究の中で，ライフコースの視点からのソーシャルサポート研究であるコンボイモデル（Kahn & Antonucci 1981; Antonucci & Akiyama 1996）は，人生におけるサポート・ネットワーク資源の変化をとらえ，時間軸を据えた点で示唆に富む。

FC研究とIC研究，それぞれの動向をみると，マクロやメゾな視点が中心のFC研究ではICが見過ごされがちであった一方で，ミクロな視点が中心のIC研究ではFCとのかかわりの議論が乏しい面があった。しかし両研究領域の発展の中で，FCとICの関連に関する研究が徐々に醸成されてきたと位置づけることができる。FCとICの関連研究のマクロなアプローチとしては，より広義には，福祉レジーム論（Esping-Andersen 1990＝2001など），福祉ミックス論やケアミックス論があげられる。たとえば，Walker（1995）がケアのトライアングルとしてFC，IC，政策をあげているように，家族介護との関係の中でフォーマルなサービスが位置づけられ，政策的な方向付けの中で両者の関連を議論する重要性が認知されてきたといえる。

近年のFCとICの関連の研究動向をみると，ケアサービスの多元化，市場化，家族やコミュニティによるケアの再評価の動向の中で，地域性，多様性，ミックス性，複雑性に着目した議論が多くなり，より広義なケアミックス研究として発展してきたことがわかる。たとえば福祉レジーム論・ミックス論の系譜においては，政策の議論の中でも高齢者ケア政策は重要な位置づけであり，家族と公的サービスだけではなく，営利企業や非営利組織などの多様な供給形態に着目した研究（Pestof 1998=2000; Evers 1999など）も多くなされている。また，ハイブリッドな形態としてのケアの議論（Fine 2007）にみられるような多

様なメカニズムの中でのケア提供の複雑性を議論した研究や，供給主体としてのソーシャルケアの多様性を論じた研究（Silpä, Anttonen & Baldock 2003），資源と負担という点から，パーソナルなケアや家事が私的領域に引き戻され，公私の責任の明確化が行われていることを示した研究（Osterle 2001）もある。我が国の動向も同様に，たとえば我が国の高齢期のケアミックスが残余的であることを示した研究（河野2010）や，介護保険制度の改革の中での「再家族化」の傾向を論じた研究（藤崎2009）がある。本稿は高齢者の視点からの議論が中心であり，マクロなアプローチの詳細な議論はしないが，ミクロなアプローチにおいても，政策や社会全体の中で位置づけられていることを認識し，社会的な文脈を踏まえたうえで議論することが求められている。

FCとICの関連研究のミクロなアプローチでは，ソーシャルサポート研究が発展する中，複数のFCとICの関連モデルが示され，それらのモデルの分類についても議論（Miner 1995; Denton 1997; Patios & Davey 2006など）がなされてきた。この点についてはこれまでも論じてきた（山口2005a・2007b・2009a）が，分類の論点を整理すると，FCとICの関係が負の影響か，正の影響かという点があげられる。負の影響のモデルとして，課題特定モデル（Litwak 1985），階層的補完モデル（Cantor 1979; Cantor & Brennan 2000），代替モデル（Shanes 1979; Greene 1983），正の影響のモデルとして，補足（リンク）モデル（Chappell 1987; Stroller 1989; Chappell & Blandford 1991; Penning & Keating 2000）がある。

調査方法・対象・地域により，これらのモデルの実証結果は異なる点に留意する必要があるが，従来は課題特定か，階層的補完か，代替かという負の影響の議論が比較的多かった中で，その反論（Penning 2002など）として正の影響の議論がなされるようになったことがわかる。たとえば，Chappell and Blandford（1991） は，FCとICとの補足関係は，インフォーマルなシステムが不十分な場合と，インフォーマルシステムは機能しているがニーズが高くインフォーマルなケアだけでは対応できない場合の2つの場合があり，どちらの場合もインフォーマルなネットワークを支援するためにフォーマルなシステムが介入していると指摘する。同様の結果は縦断的調査でも示されている（Tennstedt, Harrow & Crawford 1996）。

また，複数の国際比較研究により，マクロな制度・政策の枠組みの影響について実証的に研究されている。いくつかの研究動向をみると，たとえば，5か国（フィンランド，ドイツ，日本，英国，米国）の国際比較分析研究（Silpä, Anttonen & Baldock 2003）では，社会的ケアのアレンジメントの類型を，インフォーマル，ボランタリー，商業，国家に分類し，社会的ケアの国家的システムは，①世帯と家庭，②共通の価値観に基づくコミュニティ，③市場，④国家とくに地方政府に区別でき，これらの多様な形態や動機の複雑で変化する組み合わせにより社会的ケアが成立していることが論じられている。別の5か国（米国，カナダ，英国，ドイツ，日本）の高齢者に対する量的研究（Kunemund & Rein 1999）では，組み入れ仮説（crowding in hypothesis）と組み出し仮説（crowding out hypothesis）を検証し，組み入れ仮説が支持された結果が示されている。さらに別の5カ国（ノルウェー，イギリス，ドイツ，スペイン，イスラエル）の後期高齢者のフォーマルとインフォーマルのサポート実態比較分析（OASIS）研究（Motel-Kingebiel, Tesch-Roemer & Kondratpwitz 2005）では，代替仮説，奨励仮説，共同責任仮説を検証し，フォーマルなサービスが充実した国ほどインフォーマルな援助もあり，奨励仮説と共同責任仮説が支持されたことを示している。

FCの充実したスカンジナビアの研究では，家族は補完的役割であることやフォーマルなサービスが充実するほど家族ケアを促すという議論が多い。たとえば，Swane（1999）は，財政削減による変化はあるものの，スカンジナビアでは，FCは国の責任であり，家族は協力を選択すれば主に情緒的ケアを行う補完的システムであるとし，個人の資源に基づきケアを選択する権利を有して

いる点を論じている。スウェーデンの実証研究（Sundstrom & Johansson 2006）によれば，とくに重度の場合はFC利用が家族ケアを促す傾向が顕著だという。また，スウェーデンのホームヘルプ利用に関する研究（Herlitz 1997）も，不健康，男性，高齢，独居であることが，FCとICの受領に影響した結果を示している。

さらに，福祉レジームの違いがFC利用に関連していることを議論した研究もある。たとえば，米国とスウェーデンの75歳以上の高齢者比較調査研究（Davey, Femia, Zarit, et. al. 2005）では，介護度が重いほど両方のケアを受領するが，スウェーデンの方が米国よりその傾向が大きく，米国は補完（supplement）であり，スウェーデンは補足（complementary）であると指摘する。オランダの縦断研究（Geerlings, Pot，Twisk et. al. 2005）においても，ニーズの高まりとともに組み合わせが多いこと，階層的補完仮説と橋渡し仮説（ICがFCの利用を促す）の両方が支持されたことが示されている。また，4カ国（イギリス，イタリア，ベルギー，オランダ）の高齢者を対象に社会経済的地位（SES）のフォーマルとインフォーマルな援助の利用への影響を分析した研究（Broese & Tilburg 2003 ; Broese, Glaser, Tomassini et. al. 2006; Groenou &Tilburg 2003）では, SESの低い高齢者でとくに健康状態が悪く，未婚や死別者の方がICとFCの活用の可能性が高まること，その影響は国やケア内容により異なることが明らかにされている。

FCとICに関するこれらの研究動向からわかることは，以前は負の影響のモデルの中での議論が中心であったが，近年においては，両モデルの比較研究，さらに，組み入れ仮説や共同責任論といった正の影響のモデルの中の比較研究へと，関心の変容がみられる点である。さらに，正の影響についても，FCがICを促し奨励する場合と，ICがFC活用の橋渡しとなる場合の両方から議論されている点も研究の発展ととらえることができる。国際比較研究結果からは，公的サービスの提供方法や文化面の違いにより，国ごとに多様な結果となることがわかる。家族の在り方が変容しつつある中，家族を中心としたICとFCがどのような関係なのかは，日本のみならずグローバルな課題といえる。このようにみると，FCとICの関連の研究は，古くて新しい，ローカルでグローバルなテーマといえよう。

２．ケア選好研究の研究動向：FCとICへの選好とその関連要因

以上，FCとICの関連研究の流れを整理したが，本節ではケア選好に関する研究動向をまとめる。高齢者の選好とは一般的に望ましいという見方を示す価値観から生じる特定の選択であり，ケア実践の中で重視すべきとの指摘（Kane 2000）があるものの，終末期医療領域での多くの選好研究の蓄積に比し，高齢期全般のケア選好研究は少なく萌芽的な段階にある。

ケア選好については，ケアの具体的な内容に関する選好，介護の場所，長期・短期に必要なケアなど，多様な方法でケア選好が操作化されている（Daatland 1990; Wielink, Huijsman & McDonnell 1997; Keyso, Desai & Mutran 1999; Sorensen & Pinquart 2000 & 2001 ; Pinquart & Sorensen 2002など）。また，ケアマネージャーが利用者の価値や選好をアセスメントする効果を実証的に把握した研究（Degenholtz, Kane & Kivnick 1997; Kane, Degenholtz & Kane 1999）もあり，実践的示唆の高い研究も実施されている。

日本の研究においても，選好としてではないが介護に関する意向として把握したものとして，高齢者介護に関する世論調査（内閣府2003）などの実態調査や実証研究（和気・浅井・和気他2007など）がある。ケアの選好としては，農村における家規範の高齢者在宅福祉サービス利用選好への影響の研究（加来2001）や，大都市居住の高齢者のうち，独居や低所得高齢者ほど，手段的サポートにおけるフォーマルサポート源への選好が高いことを示した研究（権・岡田・白澤2004）などがなされている。これらのケア選好研究は，家族資源との関係を論じつつ，公的なケア

サービスに対するケア選好を論じている場合が多く，広義な意味ではFCとICの関連を考慮したケア選好研究といえる。

欧米の研究動向をみると，FCとICに対する選好とその関連要因のモデル化も複数なされている。たとえば，高齢者の介護場所選好モデル（Keyso, Desai & Mutran 1999）は，短期・長期の２つの障害の場合の想定質問とし，Andersenモデルを活用し，評価要因（施設に対する態度，経済面・家族関係面などのストレス・緊張感）とイネブリング要因（家族資源,独居形態）を区別し，主な結果として家族緊張感が高いほどケア施設選好が強いことを示した。選好発展モデル（Wielink, Huijsman & McDonnell 1997）は，短期・長期の想定質問（身体ケア/家事援助）とし，消費者行動モデルを活用し，ニーズ，個人・社会特性，介護受領経験などをモデルに投入した。主な結果として，過去のFC利用，性別，年齢，階層，ウェルビーイング，健康が関連することを示した。将来のケアニーズ準備に関する尺度（Sorensen & Pinquart 2000&2001; Pinquart & Sorensen 2002）は，短期と長期ケアを想定した質問により担い手と場所に対する選好をFCのみ，ICのみ，両方の組み合わせという回答方法で把握した。米独二か国を比較し，長期ケアであるほどFC選好が高いこと，子どもなどの家族資源を有していてもFCのみ選好が高く，利用可能性としての把握と選好は異なる結果であることを明らかにした。

また，前述したOASISデータの国際研究においては，扶養規範意識やケア選好が家族によるサポートの受領に関係すること（Loerstein & Daatland 2006）や，ケア選好は国ごとに差があるが，どの国においても家族と福祉国家の混合ケアの選好が多いこと，ノルウェー，イギリス，スペインの3か国においては扶養規範意識が高いほどサービス利用の選好が少ないこと（Daatland & Herlofson 2003）が明らかにされている。同様の研究では，伝統的ケア規範意識が強いことがFC選好を弱める（Min 2005）ことや，知人に負担をかけたくない意識が高いほどFC選好強い（Wielink & Huijsman 1999）ことが示されている。

以上の研究動向から，高齢者のケア選好研究は，近年，徐々に研究が蓄積されつつある領域であり，多様な方法で概念が操作化され，結果が示されていること，複数の関連要因モデルが提示され，地域特性，性別，家族資源，ケア意識などが関連要因としてあげられていることがわかる。

３．FCとICの関連の研究とケア選好研究の接点

これまでみてきたように，FCとICに関する研究領域の潮流とケア選好に関する研究領域の潮流の２つに大別でき，FCとICの関連に対する選好研究は両潮流の合流点であり接点といえる。両者を関連づけた研究は多くはないものの，今後，重要な研究領域であろう。

FCとICの関連の研究は，近年ではケアミックスの研究として多様な研究が蓄積されているが，高齢者の視点からの議論は十分とは言い難い。軽度なサポートにおけるFCとICの負の関係の分析から，高齢で重度なケアの場合のFCとIC両方を前提とした正の関係の分析へのシフトがなされている点は，高齢化・重度化し，FCサービス利用が不可欠な状況が多くなった時代的変化にあわせた研究領域の変容ととらえられる。また，多くの国際比較研究が実施され，福祉レジームの違いも含めて，実態分析を主とした実証研究がなされ，多くのエビデンスを提示している。しかし，高齢者自身の意向や意識を含めた研究はほとんどなされていない。

ケア選好研究の動向からは，ターミナルケアにおける選好研究に比し，長期なケアにおける選好研究は十分ではないことがうかがえた。対象者の選定，概念操作化や回答方法の違いにより多様な結果が示されているが，FCとICを組み合わせたケアを選好する場合が多いことや，家族資源の有無にかかわらずFCへの選好が高い点は，ケア選好を把握することによりわかる有益な知見である。ケア選好の関連要因も，概念の操作化やモデルの違いにより様々であるが，性別，階層，地域

特性，家族資源，FC利用経験，心理的要因，経済要因，規範意識などがあげられていた。FCとICの関連研究においては，組み入れ仮説などFCがIC活性化を促す面も議論されていたが，ケア選好研究においては，組み合わせの把握にとどまり，相対的な関係やFCとICの正の関係への議論は十分なされていない。

前述した階層的補完モデル（Cantor 1979）は，サポートに対する選好という点から把握した点で，両研究領域を複合した源流となるモデルと位置づけられる。さらに，階層的補完モデルと合わせて提起したソーシャルケアモデル（Cantor 1979；Cantor & Brennan 2000）は，フォーマルとインフォーマルの関係に焦点をあて，かつ，時間的変化に着目した点でコンボイモデルにFCを含めて発展させたモデルといえる。ただし，Cantorらは，米国での実証研究結果をもとにフォーマルサービスは最後の砦であることを示したが，果たして日本の現状においても同様なのかが疑問である（山口2005a）。介護保険制度を中核としたFC体制とその変容の中で，FCとICの関連研究とケア選好研究の我が国における接点を議論していくことが求められよう。

Ⅲ．高齢者のフォーマルとインフォーマルなケアに対する選好：実証研究からの示唆

1．高齢者のケア選好の把握

以上，FCとICの関連の研究とケア選好に関する先行研究を概観したが，主に欧米諸国で議論されてきたこれらの議論が我が国の状況にどの程度あてはまるのだろうか。ここでは，筆者がメンバーとして参加した地方小都市（長野県茅野市）の高齢者調査，大都市（東京都板橋区）の独居高齢者調査の実証研究の結果からの知見をまとめる。まず，両調査の方法論の概要を示す。より詳細なものは，別稿（冷水編2009；山口2005a，2006，2008；齋藤・冷水・山口他2009）を参照願いたい。

茅野調査は多様な手法を用いた大規模な研究プロジェクトであった。地域の高齢住民のFCとICに関する選好の把握とその関連要因の分析としては，（1）家族介護事例調査，（2）高年者への量的調査，（3）量的調査回答者への追跡事例調査という3つの異なる方法で調査する機会を得た。家族介護者事例調査（2002年7-9月に実施，31事例）は，半構造的インタビュー法によりケアの実態と選好を把握した。60-74歳の高齢住民を対象とした量的調査は2003年9-11月に実施され（訪問面接法・層化二段抽出法，回収率76.5%，有効回答810名），平均年齢は66.7歳（SD=4.5）であった。ケア選好は，①FC選好（5件法），②FC/IC組み合わせ選好（身体ケア,生活援助,声かけ,相談の4種類のケア内容,配偶者喪失期を想定，7件法），③IC担い手選好（FC/IC組み合わせ選好でICを含めた回答者に，娘，息子など8件法で把握）として操作化し，ケア規範意識，介護不安，地域特性などの関連要因に関するロジスティック回帰分析を行った。さらに，量的調査回答者のうち夫婦のみ世帯の者への追跡調査（12事例）を2005年8-9月に実施し，半構造的インタビュー法による事例分析を行った。

板橋調査では，65歳以上の独居高齢者を対象に2007年9-11月に量的調査を実施した（訪問面接法，有効回答1391名，有効回答率47.9%）。平均年齢は75.0歳（SD=6.5），全体の72.8%が女性，16.0%が要介護者，有子者は906名であった。生活援助と声かけに関するFC/IC組み合わせ選好とIC担い手選好を茅野調査と同様の方法で把握し，性別，子の有無，所得階層との関連を分析した。

2．ケアの実態とケア選好

家族介護者への事例調査では，先行研究における階層的補完モデルと代替モデルに対する仮説検証型事例分析，家族内のジェンダー関係分析，ケア選好の分析を行った。モデル検証分析では，階層的補完モデルも代替モデルも日本の家族介護の実態では当てはまらないことがわかった（山口2009a）。すなわち，FCとICを組み合わせた実態

や選好が多く，階層的補完モデルのような選好の階層性は把握できず，FCは最後の砦とは位置づけられなかった。代替性についても，特に重度の場合，FC利用しても家族ケアの減少が明白にならず，FCによるICの代替が限定的な実態であることが示された。

ICにおける家族内ジェンダー関係をみると，夫や息子による男性介護者の事例では，FC活用により，夫や息子によるケアが可能な場合や，これまでの生活の延長としてジェンダー役割意識にとらわれないケアの実態がみられた（山口2005a, 2005b, 2009d）。

高齢者自身のケア選好については，ケアを実際必要としている段階のこの調査では，十分には把握できなかった。高齢者自身の病状から選好を表現することが困難であること，表現できた場合も現状に適応した選好となることや，ケアの受け手の選好と担い手の選好があり，関係性の中で選好されることがうかがえた。

3．高齢住民のフォーマルケア選好とFC/IC組み合わせ選好

高齢住民への将来のケア選好を把握した調査では，ケア選好の操作化を工夫して調査を行った（山口2009b；山口・冷水・石川2007&2008）。高齢住民のFC選好は，在宅サービスへの選好は6割程度，施設サービスへの選好は5割弱で，比較的他の資源のある地方小都市においてもFCへの選好が高い傾向がわかった。また，女性の方が男性よりＦＣ選好が強い結果も示された。高齢住民のFC/IC組み合わせ選好は，身体ケア，生活援助，相談，声かけの順でFCを中心とした回答割合が高く，ケアの内容による回答の違いや回答にばらつきがあり多様な選好であることが確認できた。「FCのみ」の回答は，一番高い身体ケアの場合でも2割強であった。多項ロジスティック回帰分析（「IC中心」を参照カテゴリー）の結果，「FC中心」の回答にはケア規範意識（全てで有意）や介護不安（生活援助を除く3ケア内容で有意）が関連していた（山口2009b）。地域特性については，新興住宅地域居住者は他地域の居住者と比し，声かけ，相談に対する「FC中心」の回答のオッズ比が有意に高まることがわかった。

高齢住民のIC担い手選好としては，FCとICの組み合わせ選好にICを含めた回答者の中で，4つのケア内容全てにおいて，娘，息子，息子の妻のいずれかを選んだ回答の合計が約9割であり，どのケア内容においても実子とくに娘への選好が強いことがうかがえた。また，身体ケアにおいても息子への選好が2割をこえ息子の妻よりも多いこと，相談や声かけはさら息子の妻よりも実子への選好が強い結果を示した。家族・親族以外は多いものでも声かけの5%であった。息子のみいる場合，娘のみいる場合，両方いる場合に区別した分析では，親子同性の選好が高いこともわかった（山口2009c）。一人を選択する回答方式や，比較的家族資源が身近にあるという地域特性との関連がある可能性があるが，性差よりも実子選好の傾向が地方小都市でもみられた興味深い知見といえる。

4．夫婦のみ世帯のケア選好

上記の量的調査回答者の追跡事例調査（山口2008）では，量的調査では把握しえない夫婦のみ世帯の高齢者のケア選好や関連要因が浮かび上がってきた。夫婦のみ世帯の高齢者のケア選好は，ケア資源の変化とケアが必要なタイミングにより異なることがうかがえ，ライフコースの視点からみる重要性が示された。可能な限り夫婦間で支えあいたいのだが，配偶者亡きあとのことを考えると，子どもに頼りたいが頼れない気持ち，子どもの転勤や家族の状況により明確に選好しにくいことが語られた。特に身体ケアにおいては，サービスの活用がまず前提でFC利用は必然的なのだが，施設入所待機者の問題などFCの不確実性への不安も多く語られ，FCの状況によってICへの選好も揺らぐことがうかがえた。「3分の1は公的，3分の1は子ども達，3分の1は自分で（60代後半の女性，娘・息子は近居）」との発言もあり，ケアミックスにおけるセルフケアの位置付けも看過できないことが示唆された。

5．大都市の独居高齢者のFC/IC組み合わせ選好

板橋区の65歳以上の独居高齢者調査(Yamaguchi, Shimizu, Saito et. al. 2009; 山口2010）では，FC/IC組み合わせ選好において，「全てFCで」の回答が，生活援助が4割強，声かけで4割弱と，組み合わせを望まない高齢者が比較的多いことが明らかになった。「全てFCで」の回答率は男性の方が高く，高齢，有子者である程低かった。茅野調査の分析とは多少方法が異なるが，茅野では性別は有意ではなかったことも考えると，独居高齢男性は女性に比し，インフォーマルなネットワーク資源の乏しさが影響し，FCへの選好が高い傾向がある可能性もある。また，収入が高いほど，「FCのみ」の回答の確率が低くなることがわかり，独居高齢者の中の所得階層の違いにより，選好が多様であることも示された。

回答者の約4割はFCのみを選好していたのであるが，ICを含めた組み合わせを選好した人のIC担い手選好としては，娘・息子・息子の妻の回答合計が生活援助は約6割，声かけは約5割であった。家族・親族以外の回答は，生活援助は2割強，声かけは4割弱と，茅野の場合よりも高く，ICを選好する独居高齢者にとっては家族以外の近隣住民への選好が高い傾向であることもわかった。地域における近隣住民による支えあいは家族以外のインフォーマルなケアとして見過ごされがちだが重要なことや高齢者同士の支えあいの実態があることが論じられているが(Cantor1979; Barker 2002)，家族資源の乏しい独居高齢者のうち，近隣住民によるケアを選好した高齢者の多くが，地域の支えを得ながら，不安に思うことなく暮らせるのか，さらに実態との関連を把握すべきであろう。

Ⅳ．考　察

1．FCとICの織り成すケアの多様性・複雑性・可変性

先行研究レビューと実証研究による知見から，FCとICの関連が多様であり，研究の関心や領域も幅広いことがわかった。先行研究においてはFCとICの関連に関する様々な仮説やモデルがあり，負の関係のモデル検証から正の関係のモデル検証へと研究関心が変化してきたことを示した。我が国における実証研究においても，負の関係のモデルである階層的補完モデルや代替モデルは支持されず，選好による把握の場合でも，多くがFCとICを組み合わせた選好であったことが明らかになった。ケアが必要な人の選好は十分に尺度や概念が開発されていないとの指摘（Kane 2000）がある中で，ケア内容やタイミングを考慮して操作化した結果，FCとICの組み合わせ選好の多様性を確認できた意義は大きい。

また，同一基準での比較調査ではないものの，地方小都市居住の比較的配偶者がいる高齢者と，大都市居住の独居高齢者という対象の異なる調査において同様な方法でケア選好を把握し，家族がいてもFCを望む者が多いことや，独居高齢者の場合はFCのみの割合が高く，また，声かけにおいては近隣住民など家族・親族以外を選好する割合が大きかったこともわかった。ケアのニーズの高まり以外にも，高齢者自身の人生の中で維持されてきた身近なケア資源の多寡により，FCとICの組み合わせ選好も異なることもわかった。質的調査からも，ケア必要時には選好が表明しにくいことや，夫婦のみ世帯高齢者の選好を巡る複雑な心境がうかがえ，多様な高齢者のさまざまな状況やケア内容での選好を把握することの重要性と同時に，その多様性や複雑性を把握する困難さも認識できた。

これらの多様性や複雑性をより細やかに理解するには，FCとICの関連の研究においても，一時点のみならずケアの可変性を考慮することが必要である。すなわち，時間的・動態的変化を認識

し，加齢に伴うケア・ニーズの変化やケアの場所・担い手・内容・タイミングの違いにより，多様なケアの連続体となることを理解するべきであろう。時間的変化をとらえるには，ライフコースの視点が有効である。ライフコース・アプローチによる歴史的，社会・文化的文脈を踏まえて，ケアに関する家族とフォーマル機関の分業の影響を分析することの重要性（Moen, Robinson & Field 1994）や，ケアの受け手，家族，公的ネットワークの相互関連が流動的で動態的であることを前提に高齢期のケアを議論すべき（Travis 1995）と指摘されているように，FCとICの関連を高齢者の視点から論じるうえでも，時間軸に着目し，ライフコースの視点から人生におけるケアの資源の変動を見据えるべきであろう。

ライフコース研究は，累積的不利・有利論（Dannefer 2003）や，ジェンダー化されたライフコースの議論（Moen 2001）など，時間の変化に伴う蓄積されたケア資源の変化や，ケアに伴う人生におけるジェンダー関係を理解する必要性など重要な論点を示している。O'Rand（2001）は，ライフコース資本（Life-course Capital）という概念を用いて，ライフコースにおける階層化を論じているが，ライフコースにわたるケア資源・ケア資本の多様性と地域格差や個人格差（家族資源，階層格差）についても，さらなる理解が求められる。また，ケア選好を把握するうえでもライフコースとジェンダーの視点は重要であろう。

時間的変容や動態性への着目は，ソーシャル・キャピタル論（Lin 2001）やソーシャル・キャピタルとしてのケア論（Daly 2002; 山口2005a & 2007a），ケア・キャピタル論としても，近年，研究が発展しつつある領域である。ケア資源をケア資本として理解することにより，ケア資源の蓄積・減少・資源（格差）の変化をみることができる。FCの限界性・限定性とFC以外のケアの位置づけについて論じる際に，FCとICの正の関係の明確化が関心の高い研究テーマであることを示したが，さらに，時間軸を見据えて，奨励仮説や組み入れ仮説を検証していくことが重要であろう。また，橋渡し仮説のように，ICからFCにつながるメカニズムについても明らかにすることにより，たとえば比較的IC資源が豊富で健康な時期はICを中心としたケアミックスとなり，配偶者喪失などのケア資源の変化や健康状態の変化がみられた時期にはFCへのシフトが選好され実態でも利用可能であれば，財政的制約の中でも高齢者の意向を尊重し，不安を軽減した取り組みが可能となるだろう。

また，茅野の事例研究においてセルフケアの指摘があったが，FCとICのみならず，セルフケアという側面も考慮すべき（Chappell 1987）ことが指摘されているように，セルフケアとの関連も看過できない側面といえる。FCとICだけでなくセルフケアも含めて概念を操作化し，把握していくことはさらなる困難を伴うが，時間軸を考えセルフケアの変容を理解したうえで，FCとICを議論しなければ本来的な意味あいでの包括的ケアの議論とならない。

このようにとらえると，本稿ではFCとICの関連に焦点をあてたが，ケアミックスやセルフケアも含めた理論・方法の検討，ライフコースとジェンダーの視点からのさらなる検討，ケアキャピタルとしての理論的検討が求められる。同時に，マクロなアプローチにおいてケアにおける政策の影響が論じられたが，ミクロな高齢者の視点からの研究においても，制度の中でケア資源の選択の幅の制約や利用促進策があり，その枠組みのなかで選択可能なケア資源に対する選好となることを認識して，検討しなければならない。

２．ケア選好とその関連要因

高齢期のケアは多様なケアが想定され，その想定方法や回答方法により，結果が大きく異なるため，単純な比較は難しいが，複数の国々での研究において，ケア内容によって選好が異なることや，組み合わせの選好が確認できた点は興味深い。実証研究結果から，ケア選好は，①地域，対象者，ケア内容，ケアが必要なタイミング，設問の仕方などにより多様な結果となること，②ケア

の内容によりFCとICの組み合わせの選好が異なること，③ケア規範意識や子の有無などが関連することがわかった。家族資源が身近にあってもFCのみの選好やFCを中心とした選好の場合も多く，実子によるケア選好の強さと同時に，不確実性や不安もあることがうかがえた。

欧米の研究では，性差に伴うタブーと関連し，身体ケアは娘，伝統的に男性の役割である内容（財産・家屋管理など）は息子，買物などジェンダー中立な内容の場合は娘と息子の関与差がないとの結果（Campbell & Martin-Marthews 2003）が示されているが，茅野での事例調査では，夫や息子の多くがジェンダーを意識せず，やれる人がやればいいという思いで，工夫しながらケアを実践していた。量的調査でも，息子の妻によるケアの選好は少なく，身体的ケアにおいても息子への選好が高い結果が示された。地方小都市においても，ケア規範や老親扶養義務感がゆらぎ，介護における嫁役割も変容していることがうかがえる。

実証研究ではケア規範がケア選好に関連することを確認したが，前述の欧州5カ国のケア実態の比較分析（Motel-Klingebiel, Tesch-Roemer & Kondratpwitz 2005）では，ケア選好変数は家族-福祉志向意識として合成されて投入され，家族によるケアやケア全般の受領にこの意識変数が有意であった。ケア選好やケア規範意識がケアの実態に影響するというこの知見は，ケア選好がFCとICの利用行動にも関連することを示しており，将来のケアの在り方を検討するうえでも選好の把握が参考になることを示している。

ケア規範はケア選好に対する重要な関連要因であったが，板橋区の独居高齢者調査では，独居高齢者の場合はケア規範の影響よりも，そもそも家族を中心とした家族資源の乏しさがFCのみへの選好の多さに関連していることがうかがえた。未婚・離婚の独居高齢者と晩年配偶者を亡くした高齢者では，独居といっても異なる家族状況・経済状況であり，ジェンダー化されたライフコースの視点で，性別，階層などの違いとケアが必要なタイミングの違いをみていくことが求められる。高齢期におけるジェンダーと不平等の研究（Calasanti & Slevin 2001），介護のネットワークと階層についての研究（大和 2004），大都市独居高齢者と社会的孤立との関連の研究（河合2009; 斉藤・冷水・山口他2009 ;斉藤・冷水・武居他2010）など，高齢期の不平等・貧困・孤立については多くの研究蓄積がある。ケア選好の観点からのアプローチにおいても特に独居高齢者については階層とケア資源ネットワークの関係を細やかに把握することが必要であろう。

３．FCとICの関連研究における高齢者自身のケア選好アプローチの課題と可能性

FCとICの関連の研究においては，高齢者自身の視点からの研究が少ないことを示し，そのような中でFCとICの関連の研究とケア選好研究との接点から得られる知見をまとめた。FCとICの関連の研究における高齢者のケア選好からのアプローチの課題と可能性は以下の点があげられる。

第一の課題は方法論上の課題，とくにケア選好概念の操作化における課題である。ライフコースの視点からケア選好を検討する必要性を論じたが，ケアの多様性・複雑性・可変性を明らかにするには，さらに概念操作を精緻化しなければならない。他者との関係，たとえば，子ども世代の状況に応じたケア選好はどう把握できるのか。ケア選好は，FC・IC・セルフケアの変化に応じてどのように変容するのか。未婚・離婚高齢者や子どものいない高齢者のケア選好は，家族資源の豊富な高齢者のケア選好とどう異なるのか。これらの点に極め細やかに対処するには，量的調査と質的調査，縦断調査などを有効に活用しながら，時間の変化や地域差をふまえた研究方法や，実践的研究方法の検討が必要である。さらに，ケア資源の地域・個人格差とケア選好の関連を明らかにすること，ケアの受け手と担い手のケア選好と実際のケアリング関係を実証していくことも重要である。

第二の課題としては，先行研究レビューで明らかになったFCとICの正の関連について，ケア選

好アプローチにおいて，どのように新たな知見を提供できるのかという理論的検討が必要な点である。筆者らが行った量的調査においても，FCとICの多様な組み合わせについては，ケア内容の違いなど様々な点を示すことができた。しかし，横断調査による一時点を想定した静態的な把握であることの限界により，動態的な変化やFCがどのような体制であればICへの選好も高まるのかなどの動態的議論のためのエビデンスは限定的であった。量的調査による把握の困難もあるが，FCとICの関連研究で近年活発にFCとICの正の関係が議論されていることを参考に，ケア選好という高齢者の声の部分からどのようにこれらの議論に貢献できるのか，さらに検討すべき課題といえる。

実践的課題としては，高齢者自身のケア選好アプローチにより，ケアマネジメントや地域ケア実践に知見がいかせるような実証研究の検討があげられる。米国での実践的介入研究（Degenholtz, Kane & Kivnick 1997）を参考に，独居高齢者対応のためのエビデンスやケアマネジメントのツールとして調査結果が活用できる方法を検討すべきであろう。

これらの課題は，別の見方をすればこのアプローチの可能性にもつながる。多様なケア選好の把握は困難を伴うものの，高齢者自身のケアに対する声の多様性を理解することは，利用者の自己決定を尊重したケアの実践に役立つ。終末期のケア選好は多くの研究があるが，終末期のみならず高齢期全般において高齢者の尊厳を認め，「利用者主体のケア」を推進するうえでも高齢期全般のケア選好研究が求められる。高齢者の視点から高齢者の望む「介護の社会化」の在り様を示すことは，制度論や資源提供論ではあきらかにできないボトムアップな側面からFCとICの関連の研究に示唆を与えることにもなる。利用者自身のケアサービスの活用や選択に対する選好を把握することにより，「利用者主体のケア」と「介護の社会化」の接点からFCとICのあり様を問うことにもなるであろう。言い換えれば，FCとIC関連研究における高齢者のケア選好に着目した本研究のアプローチにより，高齢者自身の意向や声を把握しながら，地域における包括的なケアを目指すうえで有用な知見を得られる可能性がある。

Ⅴ．まとめ

先行研究レビューを行うとともに実証研究結果を整理し，FCとICの関連の研究とケア選好研究の接点を探り，FCとICの関連の研究における高齢者のケア選好アプローチの課題と可能性を検討することが本稿の目的であった。FCとICの関連の研究では，国際比較研究や両者の正の関係の研究が近年多くみられること，ケア選好に関する研究は萌芽的段階にあり，FCとICに関する選好研究は多くはないが，両研究領域の接点といえることがうかがえた。FCとICの組み合わせ選好が多いことやケア選好の関連要因としてはケア規範や地域特性などがあることなどの実証研究からの示唆をもとに，我が国の文化的背景も含めた理論的検討を試みた。FC/IC関連研究とケア選好研究の両者を概観したために議論が広がった面もある点，我が国の研究が少ないこともあり欧米の研究のレビューが中心であるため，国や制度の違いに留意すべき点，二つの地域における複数の実証研究結果の概略を示したうえでの議論であるため，日本の状況に即してさらに詳細に検討すべき点が本研究の限界であり，今後の研究課題である。

FCとICの関連の研究における高齢者のケア選好アプローチには，ケア選好概念の操作化の工夫などの方法論上や，ライフコースにおける時間的変化への検討などの理論上の課題がある。それらの課題はあるものの，ケア選好からのFCとICの関連の研究により，高齢者自身の意向を尊重したFCとICの議論の発展に寄与できる可能性がある。

本研究の意義としては，これまで十分に論じられてこなかったFCとICの関連の研究とケア選好研究の接点に焦点をあて，ケアの選好に着目したFC/IC関連研究の意義を考察したことにより，高齢者自身のケア選好の多様性に対する理解を

深め，高齢者自身の意向を取り入れたFCとICの議論への示唆を提示した点があげられる。欧米の研究の多くが老年学的アプローチに基づくものであったが，これらの老年学的アプローチからの示唆をソーシャルワーク研究や実践に活用できるよう，今後は研究課題に対処しつつ，ケアマネジメントや地域ケア実践に本研究の知見がいかせるような実証研究を行いたい。

［謝辞］

本稿は，日本社会老年学会第52回大会における奨励賞受賞講演の報告（山口2010）をもとに，一部を加筆・修正してまとめた。学会関係各位に謝意を表したい。また，今回報告した調査研究は，平成14-15年度ニッセイ財団高齢者福祉実践研究助成（代表：冷水豊），平成15-17年度科研（基盤B）（代表：冷水豊），平成16年度日本興亜ジェロントロジー研究助成（代表:山口麻衣），平成19-20年度科研（基盤B）（代表:冷水 豊）の助成を受けて行われた。調査協力者の皆様と関係各位に感謝申し上げたい。

本稿は、平成22年度科研（基盤Ｂ）（代表 山口麻衣）「地域変動下の地域ケアミックスの課題と可能性 ── ケアリング関係の視点からの高齢者支援」（課題番号22330171）の研究成果の一部である。

引用文献

Antonucci, T.C. and Akiyama, H（1996）Convoys of Social Relations: Family and Friendships with a Life Span Context. Blieszner, R. and Bedford, V. H eds., *Aging and the Family: Theory and Research,* Preager Publisher, 355-371.

Barker J.C.（2002）Neighbors, Friends, and Other Non-kin Caregivers of Community-Living Dependent Elders. *Journal of Gerontology: Social Sciences,* 57B（No.3）, S158-167.

Broese G.M. and Tilburg T.（2003）Network size and support in old age: differentials by socio-economic status in childhood and adulthood, *Ageing & Society*, 23, 625-645.

Broese G.M., Glaseer, K., Tomassini, C. et al.（2006）Socio-economic Status Differences in Older People's Use of Informal and Formal Help: A Comparison of Four European Countries, *Ageing & Society*, 26, 745-766.

Cantor, M.H.（1979）Neighbors and Friends: An Overlooked Resource in Informal Support System. *Research on Ageing*, 1（4）, 434-463.

Cantor, M.H. and Brennan, M.（2000）*Social Care of the Elderly: The Effects of Ethnicity, Class, and Culture,* Springer Publishing Company, Inc.

Calasanti, TM, and Slevin, KF.（2001）*Gender, Social Inequalities, and Aging,* AltaMaria Press.

Campbell, L,D., and Martin-Marthews, A.（2003）The Gendered Nature of Men's Filial Care, *Journal of Gerontology: Social Sciences,* 58B（6）, S350-S358.

Chappell, N.L.（1987）The interface among three systems of care: self, informal, and formal. In R. A. Ward & S. S. Tobin（Eds.）, *Health in aging: sociological issues and policy directions,* 159-179, NY: Springer.

Chappell N.L. and Blandford A.（1991）Informal and Formal Care: Exploring the Complementarity, *Ageing & Society* II, 299-317.

地域包括ケア研究会（2010）『地域包括ケア研究会報告書』.

Daatland, S.O.（1990）'What are Families For?' On Family Solidarity and Preference for Help, *Ageing and Society,* 10, 1-15.

Daatland, S.O. and Herlofson, K.A.（2003）'Lost solidarity' or 'changed solidarity: a comparative European view of normative family solidarity, *Ageing & Society,* 23, 537-560.

Daly, M.（2002）Care as a Good for Social Policy. *Journal of Social Policy,* 31（2）, 251-270.

Daly, M. and Lewis, L.（2000）The Concept of Social Care and the Analysis of Contemporary Welfare State. *British Journal of Sociology,* 51（2）, 281-298.

Dannefer, D.（2003）Cumulative Advantage/disadvantage and the Life Course: Cross-fertilizing Age and Social Science Theory. *Journal of Gerontology: Social Sciences*, 58B（6）, S327-S337.

Davey, A. Femia, E, Zarit, S, et. al.（2005）Life on the Edge: Patterns of Formal and Informal Help to Older Adults in the Unitede States and Sweden, *Journal of Gerontology: Social Sciences,* 60B（No.5）, S281-288.

Degenholtz, H., Kane, R.A., and Kivnick, H.Q.（1997）Care-related Preferences and Values of Elderly Community-based LTC Consumers: Can Case Managers Learn What's Important to Clients? *Gerontologist*, 37（6）, 767-776.

Denton, M.（1997）The Linkages between Informal and Formal Care of the Elderly. *Canadian Journal on Aging* 16（1）: 30-50.

Esping-Andersen, G.（1990＝2001）『福祉資本主義の三つの世界：比較福祉国家の理論と動態』岡沢憲芙・宮本太郎監訳，ミネルヴァ書房.

Evers, A.（1999）「混合福祉供給システムにおける第3セクターの社会サービス ── 去り行く過去と不確実な未来の間」的場信樹訳,川口清史・富沢賢治編『福祉社会と非営利・協同セクター ── ヨーロッパの挑戦と日本の課題 ──』日本経済評論社，205－216.

Fine, M, D.（2007） *A Caring Society? Care and the Dilemmas of Human Service in the 21st Century,* Palgrave Macmillan.

藤崎宏子（2009）「介護保険制度と介護の「社会化」「再家族化」」『福祉社会学研究』6,41-57.

Geerlings S., Pot, A., Twisk, J, et. al.（2005）Predicting transitions in the use of informal and professional care by older adults, *Ageing & Society* 25, 111-130.

Greene, V.L.（1983）Substitution between Formally and Informally Provided Care for the Impaired Elderly in the Community. *Medical Care* 21(6), 609-619.

Groenou, M,I. and Tilburg T.V.（2003）Network size and support in old age: differentials by socio-economic status in childhood and adulthood. *Ageing & Society* 23, 625-645.

林暁淵，岡田真一，白澤政和（2007）「大都市独居高齢者の子どもとのサポート授受パターンと生活満足度」,『社会福祉学』，48(4)：82-450.

Herlitz, C.（1997）Distribution of Informal and Formal Home Help for Elderly People in Sweden. *The Gerontologist,* 37(1), 117-124.

Kahn, R.L. and Antonucci, T.C.（1981）Convoys of Social Support: A Life-course Approach, S. Kiesler, B., J. Morgan, N. and V. Oppenheimer, Kincade eds. *Aging: Social Change*, Accademic Press, 383-405.

加来和典（2001）「高齢者在宅福祉サービスの選好について」木下謙治・小川全夫編,『家族・福祉社会学の現在』ミネルヴァ書房,174-190.

Kane, R.A.（2000）Values and Preferences, R. L. Kane and R.A. Kane eds., *Assessing Older Persons: Measures, Meaning, and Practical Applications,* Oxford University Press, 237-260.

Kane, R.A, Degenholtz, H.B., and Kane, R.L.（1999）Adding Values: an Experiment in Systematic Attention to Values and Preferences of Community Long-term Care Clients. *Journal of Gerontology: Social Sciences,* 54B(2), S109-119.

Keysor, J.J., Desai, T. and Mutran, E.J.(1999)Elders' preferences for care setting in short- and long-term disability scenarios. *Gerontologist,* 39(3), 334-344.

河合克義（2009）『大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立』，法律文化社.

小林江里香，杉原陽子，深谷太郎ほか（2005）「配偶者の有無と子どもとの距離が高齢者の友人・近隣ネットワークの構造・機能に及ぼす効果」,『老年社会科学』，26(4)：438-450.

河野真（2010）「高齢者ケアミックスの変容過程 ── 介護保険導入以降の制度改革の分析を中心に ──」『社会政策』2(1), 93-106.

高齢者介護研究会（2003）『2015年の高齢者介護（高齢者介護研究会報告書）～高齢者の尊厳を支えるケアの確立について～』法研.

これからの地域福祉のあり方に関する研究会（2008）『地域における「新たな支え合い」を求めて ── 住民と行政の協働による新しい福祉 ──』全国社会福祉協議会.

Kunemund, H and Rein M（1999）There is more to receiving than needing: theoretical arguments and empirical explorations of crowding in and crowding out, *Ageing & Society*, 19, 93-121.

権泫珠・岡田進一・白澤政和（2004）「大都市在住高齢者のソーシャルサポート源に対する選好度の特徴 ── 手段的サポートと情緒的サポートにおける類似点と相違点 ──」『社会福祉学』44-(3), 52-61.

Lang, F.R.（2004）The Availability and Supportive Functions of Extended Kinship Ties in Later Life: Evidence from the Berlin Ageing Study, Harper S Ed, *Families in Aging Societies: A Multi-Disciplinary Approach,* Oxford University Press, 64-68.

Lin, N.（2001）*Social capital, A theory of social structure and action,* Cambridge University Press.

Litwak, E.（1985）*Helping the Elderly: The Complementally Roles of Informal Networks and Formal Systems,* The Guilford Press.

Loerstein, A. and Daatland, S.（2006）Filial norms and family support in a comparative cross-national context: evedence from the OASIS study, *Ageing & Society* 26, 203-223.

Matthews, S.H.（1995）Gender and the division of filial responsibility between lone sisters and their brothers. *Journal of Gerontology: Social Sciences,* 50B(5), S312-320.

Min, J.W.（2005）Preference for Long-Term Care Arrangement and its Correlates for Older Korean Americans, *Journal of Aging and Health,* 17-3,

363-395.

Miner, S. (1995) Racial differences in family support and formal services utilization among older persons: a nonrecursive model. *Journal of Gerontology: Social Sciences*, 50B(No.3), S143-153.

Moen, P. (2001) The Gendered Life Course, R. H. Binstock and L. K. George eds., *Handbook of Aging and the Social Science,* Academic Press 179-196.

Moen,P., Robinson,J. and Fields,V. (1994) Women's Work and Caregiving Roles: A Life Course Approach. *Journal of Gerontology: Social Sciences,* 49 (4), S176-186.

Motel-Klingebiel, A., Tesch-Roemer, C. and Kondratpwitz, H-J. (2005) Welfare States do not crowd out the Family: Evidence for Mixed Responsibility from Comparative Analyses, *Ageing & Society,* 25, 863-882.

内閣府 (2003)『高齢者介護に関する世論調査』.

O'Rand, A.M. (2001) Stratification and the Life Course: The Forms of Life-course Capital and Their Interrelationships, R. H. Binstock and L. K. George eds., *Handbook of Aging and the Social Sciences,* Academic Press, 197-213.

Osterle, A. (2001) *Equity choices and long-term care policies in Europe: Allocating resources and burdens in Austria, Italy, the Netherlands and the United Kingdom*. Ashgate Publishing Limited.

Patsios, D. and Davey, A. (2005) Formal and Informal Community Care for Older Adults, MaLcom L. Johnson ed, *The Cambridge Handbook of Age and Ageing,* Cambridge University Press, 597-604.

Penning, M.J. (2002) Hydra Rivised: Substituting Formal for Self- and Informal In-home Care Among Older Adults with Disabilities. *The Gerontologist,* 42(1), 4-16.

Penning, M.J. and Keating, N.C. (2000) Self-, Informal and Formal Care: Partnerships in Community-Based and Residential Long-Term Care Settings. *Canadian Journal on Aging,* 19(1), 75-100.

Pestoff, V.A. (1998=2000)『福祉社会と市民民主主義 ── 協同組合と社会的企業の役割 ──』日本経済評論社.

Pinquart, M. and Sorensen, S. (2002) Older Adults' Preferences for Informal, Formal, and Mixed Support for Future Care Needs: A Comparison of Germany and the United States. *International Journal of Aging and Human Development,* 54 (4), 291-314.

Rossi, A.S. (1993) Intergenerational relations: gender, norms, and behavior. In V. L. Bengtson & W. A. Achenbaum (Eds.), *The changing contract across generations,* 191-211, Aldine De Gruyter.

斉藤雅茂, 冷水豊, 武居幸子ほか (2010)「大都市高齢者の社会的孤立と一人暮らしに至る経緯との関連」,『老年社会科学』, 31(4): 470-480.

斉藤雅茂・冷水豊・山口麻衣ほか (2009)「大都市高齢者の社会的孤立の発現率と基本的特徴」,『社会福祉学』50(1), 110-122.

Shanas, E. (1979) Social Myth as Hypothesis: The Case of the Family Relations of Older People.*The Gerontologist* 19(1), 3-9.

冷水豊編著 (2009)『「地域生活の質」に基づく高齢者ケアの推進 ── フォーマルケアとインフォーマルケアの新たな関係をめざして』, 有斐閣.

白波瀬佐和子 (2000)「家族内支援と社会保障 ─ 世代間関係とジェンダーの視点から ─」『季刊・社会保障研究』, 36-1, 122-133.

Silpä, J., Anttonen, A. and Baldock, J. (2003) The Importance of Social Care. In A. Anttonen, J. Baldock and J Sipilä, Eds. *The Young, the Old and the State,* 1-23, Edward Elgar Publishing.

Sorensen, S., and Pinquart, M. (2000) Preparation for Future Care Needs by West and East German Older Adults. *Journal of Science in Gerontology B,* 55(6), S357-367.

Sorensen, S., and Pinquart, M. (2001) Developing Measure of Older Adults' Preparation for Future Care Needs, *International Journal of Aging and Human Development*, 53(2), 137-165.

Stroller, E.P. (1989) Formal Services and Informal Helping: The Myth of Service Substitution. The *Journal of Applied Gerontology,* 8(1):37-52.

Sundström, M. and Johansson, L, (2006) Balancing Family and State Care:Niether, Either or Both? The Case of Sweden, *Ageing & Society,* 26,767-782.

Swane, C.E. (1999) The Relationship Between Informal and Formal Care. In J. Campbell, Creighton. & N. Ikegami (Eds.), *Long-term Care for Frail Older People: Reaching for the Ideal System*, 49-53, Springer.

Tennstedt, S.L., Harrow, B and Crawford, S.(1996) Informal care vs. formal services: Changes in patterns of care over time. *Journal of Aging and Social Policy* 7 (3/4), 71-91.

Travis, S.S. (1996) Families and formal network. In R. Blieszner & V. H. Bedford (Eds.), *Aging and the family: Theory and research,* 458-473, Westort,

CT: Prager publishers.
山口麻衣（2005a）「高齢期のケア選好とケア資源：ジェンダーとライフコースの視点からみたフォーマル・ケアとインフォーマル・ケア関連の分析」，上智大学大学院文学研究科2004年度博士学位論文（社会福祉学）.
山口麻衣（2005b）「要介護時のケア実態とケア選好：ジェンダーとライフコースの視点からの事例分析」『埼玉学園大学紀要』，人間学部篇，第5号，159－172，埼玉学園大学.
山口麻衣（2006）「高齢者のケア規範 ── 扶養期待感とジェンダー規範の関連を中心に ── 」『老年社会科学』27,407-415.
山口麻衣（2007a）「「介護の社会化」論とソーシャルキャピタルとしてのケア」『研究紀要』,第5号,15－30,宇都宮短期大学人間福祉学科.
山口麻衣（2007b）「高齢者ケアにおけるケア・ミックス」ケアリング研究会編著『ケアリング研究会研究報告書Ⅰ　高齢者ケア政策の展開とケアリング関係の再編』，104-120.
山口麻衣（2008）「ライフコースの視点からの高齢期のケアミックス：夫婦のみ世帯高齢者へのインタビュー調査の分析から」『研究紀要』,第6号，75-86.宇都宮短期大学人間福祉学科.
山口麻衣（2009a）「フォーマルケアとインフォーマルケアの関係に関する仮説検証的事例分析」冷水豊編『「地域生活の質」に基づく高齢者ケアの推進―フォーマルケアとインフォーマルケアの新たな関係をめざして』有斐閣，87-106.
山口麻衣（2009b）「ケア選好の面から見たフォーマルケアとインフォーマルケア推進の可能性とそのための条件」，冷水豊編『「地域生活の質」に基づく高齢者ケアの推進 ── フォーマルケアとインフォーマルケアの新たな関係をめざして』有斐閣，170-197.
山口麻衣（2009c）「ケア・ミックスにおけるジェンダー関係 ── 成人子によるケアに対する高齢者の選好の分析 ── 」『ルーテル学院研究紀要』第42,63-75,ルーテル学院大学.
山口麻衣（2009d）「フォーマルケアとの組み合わせの中での家族ケア ── インフォーマルケアにおけるジェンダー関係」『上智大学社会福祉研究』第33号,21-34, 上智大学.
山口麻衣（2010）「フォーマルケアとインフォーマルケアの関連 ── 高齢者のケア選好の課題と可能性」『老年社会科学』, 32-2, 154-155, 日本老年社会科学会第52回大会（あいち健康プラザ）.
山口麻衣・冷水豊・石川久展（2007）「フォーマル・ケアとインフォーマル・ケアの組み合わせ選好と地域特性との関連 ── 高年住民のケア選好に着目して ── 」，『日本の地域福祉』，20,87-99.
山口麻衣・冷水豊・石川久展（2008）「フォーマルケアとインフォーマルケア組み合わせに対する地域高齢住民の選好の関連要因」，『社会福祉学』，49,123-134.
Yamaguchi, M, Shimizu, Y, Saito, M et.al.（2009）Care Mix for the Elderly Living Alone in Japan: Who provides support for them? *The Journal of Nutrition, Health & Ageing*, S534-S535（The 19th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics, Paris, France, July 7, 2009.）
大和礼子（2004）「介護ネットワーク・ジェンダー・社会階層」渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編著『現代家族の構造と変容：全国家族調査［NFRJ98］による計量分析』東京大学出版会,367-385.
和気純子・浅井正行・和気康太ほか（2007）「介護保険制度施行5年後の高齢者の介護サービス認知と利用意向 ── 全国調査（2005）のデータ分析を通して ── 」『厚生の指標』54-15,1-8.
Walker, A.（1995）The Family and the Mixed Economy of Care-Can They Be Integrated? I. Allen and E. Perkins Eds., *The Future of Family Care for Older People*, HMSO, 201-218.
Wielink, G., Huijsman, R. and McDonnell, J.（1997）Preferences for Care: A Study of the Elders Living Independently in the Netherlands. *Research on Aging,* 19(2), 174-198.
Wielink, G, and Huijsman, R.（1999）Elderly Community Residents' Evaluate Criteria and Preferences for Formal and Informal In-home Services. *International Journal of Aging and Human Development,* 48(1), 17-33.

A Point of Contact between Studies of Formal/Informal Care Relations and Care Preferences

Yamaguchi, Mai

The purpose of this study, which is based on a review of previous research and the author's own empirical findings, is twofold: (1) to explore a point of contact between studies on the relationship between formal and informal care and studies of care preferences; and (2) to discuss both the challenges and possibilities for preference-based care for elderly people, as found in research on the relationship between formal and informal care. Recently many international comparative studies and studies focusing on the positive relationship between formal and informal care have been conducted. Research on care preferences is growing, and though there are not many studies that have been conducted on preferences related to formal and informal care, a point of contact between the two fields can be said to exist. Findings from empirical studies in two communities, remote and urban, showed that many elderly people prefer formal and informal combination care, and that many factors, including care norms and local characteristics, contribute to the care preferences of seniors. Methodological challenges, such as putting a preference-based care concept into operation, and theoretical issues, such as considering changes in preference over the life course, presented obstacles to preference-based care for elderly people in studies on the formal and informal care relationship. Despite these challenges, a preference-based care approach for studies of formal and informal care can contribute to the development of a discussion of formal and informal care that values the viewpoint of the elderly person.

Keywords：Formal/Informal Care, Care Preferences, Elder Care, Life Course, Care Resources